
依存する世界と似非なる自殺願望

みさきとあいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

依存する世界と似非なる自殺願望

【Nコード】

N6322I

【作者名】

みさきとあいす

【あらすじ】

充実しない大学生が、ある日、突然異世界と現実世界を行き来できるようになる。

そこにあっただのは、現実世界にはない非日常の連続。

今までない体験に、次第に異世界に依存していく。

その依存はもう自分では止められなくなってしまい……

幸せが怖い

その日、世界は一変した。

その世界は私を殺した。

大学に入ってもう二年と半年が経つが、俺は未だにクラスの奴らと馴染めずにいる。いや、友達がいらないわけじゃないんだ。いるんだけど、上辺だけみたい。会話もイマイチ盛り上がらない。

昼食の時間、俺は聞き役に徹する。特に、会話に参加するわけでもなく、ただうなずき愛想笑いをする。いつもかわらない。くっだらない。

今日も授業が終わり、自宅へ帰る。もちろん、直帰だ。寄り道の誘いもない。学校と家の往復、これをあと二年続けるのか。アホらしい。死にたい。

自殺願望が湧いてきたのは、大学に入ってから。友人ともあまり馴染めず、顔も悪い、スタイルは百七十センチの四十八キロのガリガリと、劣等感の塊になってしまった。おかげさまで、性格もひねくれてしまった。いや、これは自分次第なのだろうけど、それでも劣等感の影響は大きい。

学校から家までは、電車を乗り継ぎ約一時間半。毎日三時間も移動に使っているのだ。あほか。時間が勿体無い。時給八百円で計算すると、週に一万二千円も稼げる計算だ。まあ、こんなことを考えながら、いつも帰っている。無駄ではないだろ？ふふふ。

家に帰ると、俺宛の荷物が届けられていた。何か頼んだ覚えはない。

差出人はアヤとだけ書かれていた。
怪しい。これは、新手の詐欺か？考えてみたが、めんどつなので開けてみた。

世界は一瞬で変わる。

それは、ふとしたキツカケだったんだ。

ちよつとした綻びが、原因みたいなの？

なぜ、疑問形か？

それは俺が知りたい。

アルナタ王国は、魔王討伐に力を注いでる国の一つ。一年前の、第三魔王軍自爆テロにより、王様を失って以来、魔王討伐に躍起になっている。魔法の研究も、世界でかなり進んでいるほうと言われている。

「姫！召喚装置の起動に成功しましたぞ！」

「ほんとに！？これで、魔王を殺せる剛腕勇者を召喚できるし！」

おおー。研究室内がざわめき出す。装置が、ガタガタと古臭い音を出しながら、動いている。そこに、いたのは

妄想

その日、世界は一変した。

その世界は私を殺した。

大学に入ってもう二年と半年が経つが、俺は未だにクラスの奴らと馴染めずにいる。いや、友達がいらないわけじゃないんだ。いるんだけど、上辺だけみたい。会話もイマイチ盛り上がらない。

昼食の時間、俺は聞き役に徹する。特に、会話に参加するわけでもなく、ただうなずき愛想笑いをする。いつもかわらない。くっだらない。

今日も授業が終わり、自宅へ帰る。もちろん、直帰だ。寄り道の誘いもない。学校と家の往復、これをあと二年続けるのか。アホらしい。死にたい。

自殺願望が湧いてきたのは、大学に入ってから。友人ともあまり馴染めず、顔も悪い、スタイルは百七十センチの四十八キロのガリガリと、劣等感の塊になってしまった。おかげさまで、性格もひねくれてしまった。いや、これは自分次第なのだろうけど、それでも劣等感の影響は大きい。

学校から家までは、電車を乗り継ぎ約一時間半。毎日三時間も移動に使っているのだ。あほか。時間が勿体無い。時給八百円で計算すると、週に一万二千円も稼げる計算だ。まあ、こんなことを考えながら、いつも帰っている。無駄ではないだろ？ふふふ。

家に帰ると、俺宛の荷物が届けられていた。何か頼んだ覚えはない。

差出人はアヤとだけ書かれていた。

怪しい。これは、新手の詐欺か？考えてみたが、めんどうなので開けてみた。

世界は一瞬で変わる。

それは、ふとしたキツカケだったんだ。

ちよつとした綻びが、原因みたいなの？

なぜ、疑問形か？

それは俺が知りたい。

アルナタ王国は、魔王討伐に力を注いでる国の一つ。一年前の、第三魔王軍自爆テロにより、王様を失って以来、魔王討伐に躍起になっている。魔法の研究も、世界でかなり進んでいるほうと言われている。

「姫！召喚装置の起動に成功しましたぞ！」

「ほんとに！？これで、魔王を殺せる剛腕勇者を召喚できるし！」

おおー。研究室内がざわめき出す。装置が、ガタガタと古臭い音を出しながら、動いている。そこに、いたのは

意味が分からなかった。

目の前がブラックアウトしたかと思ったら、目の前に超可愛い女の子がいる。

彼女は、上にグレーのパーカーに、下はデニムのミニスカートにレギンス、でもってスニーカー。

俺好みの格好だ。周りにはちょっとおかしいと言われるが。

「ちよつと！」

つい、舐めまわすように見てしまったか。訴えられたらマズいな。

「いや、俺はあなたの後ろのその本棚を見てい……」

「うるさいっつ！」

突然大きな声を出すので、俺はびっくりして後ずさりしてしまった。

「あんたみたいなのが本当に魔王を倒せんの!？」

意味が分からない。そういえば、ここは何処だ？俺は……何を……

周りを見ると、白い白衣を着た、いかにも研究員ってやつがかなりいる。

ここは、俺の家じゃない……？何処だ……魔王？ドラクエかよ。

考えていると、リーダーであろう初老の男が話し出す。

「あなたは勇者に選ばれました。魔王を殺してもらいます。」

「異世界から来られたので分からないことも多いとは思いますが、こちらとしても全力でサポートしたいと思っておりますので、よろしく願います。」

胡散臭い喋り方だ。俺が何年か前にネットで知り合ったビジネス仲間に似ている。

結局、そいつは共有の運転資金を持ち逃げして消えてしまった。思い出すだけで腹が立つ。

だが、今の状況が分からないので、詳しく説明してもらうことにした。

すると、初老の男は待ってましたと言わんばかりに、得意気な顔で語り出す。

現実

俺は、状況を理解するのに時間がかかった。当たり前だ。突然、異世界へワープなんて信じられるわけがない。

この世界は、2つの生き物がいる。人間と魔物。

昔、魔物は容姿が醜いと理由で人間に迫害されていたらしい。その差別に納得いかない魔物たちは、人間の街を襲い、多くの人間を殺した。もちろん、人間もやり返す。

魔物を見つけたら手当たり次第に殺す。懸賞金まで出す始末。そんなこんなで続いた戦いも、一度は終わったみたいなんだが、最近また再開したとのこと。そこで、より強い人材を求めて、勇者召喚装置を開発したらしい。で、何故か俺がこんなところにくる羽目になった。信じられない。

だが、これが現実。受け入れないといけない。俺が、最も苦手なことでだけ。

「早速だけどお手並み拝見といこうかしら」
姫と呼ばれる彼女は、おもむろに包丁を取り出し、俺に手渡す。まさか、これが、武器なのか？

やけに現実的だな。剣とかだろ普通。なんて、考えていると、奥の部屋からスライムが飛び出てきた。

そう。あのスライム。ドラクエでお馴染みの。フラスコのような形をして、身体は青く、表情は笑っている。だけど、スライムはその表情とは裏腹に、「あぎややあいあつつ

「！！！」と怒り狂ったような声を出し、俺に襲いかかってきた。

「うおっ！？」

思わず包丁を前に出す。グチャリ。

不快な音がして、スライムは自ら包丁に突き刺さる形になった。

スライムは、アイスが溶ける時のようにドロドロに溶けていった。

俺は…

何もリアルを感じなかった。これが、生き物を殺すことだとも思わなかった。ただ、ゲームをしている気分。仮想空間。何の感情も嘘。喜びも何もない。

ゲームの中の主人公がいくら攻撃を受けても、現実の俺は痛くない。いくら攻撃をしても罪悪感を感じることもない。

だから、この世界では傷つかない。全ての感情は、もう一人の自分なのだ。本当の自分が傷つくことはない。

この世界でなら、俺は無敵な気がした。

恋

「やだっ！結構やるじゃんー！」

姫が俺に抱きついてきた。柔らかいふくらみが俺の身体に当たる。

おおーっ！

思わず心の中でガッツポーズ。なんかこれだけで幸せ。

「んんー」

姫が顔を俺の胸にスリスリと押し付ける。その仕草があまりにも可愛らしくて、思わず頭を撫でてしまった。

姫が、顔をあげ俺の顔を見る。

やばい、馴れ馴れしすぎた。女の子は頭を撫でられるのが好きと、Yahoo!の知恵袋に書いてあったが釣りだったのか。

と思ったが、そんな心配とは裏腹に彼女は、とろけそうな目でこちらを見ていた。その目はまるで甘えた子猫ちゃん。なんてな。

俺たちは抱き合ったまま少しの間見つめあっていた。

「うおっほん！」

先ほどの初老の男が、わざとらしく咳払いする。

それで、我に帰った俺たちは、パツと身体を離す。彼女は、ぼーっとして目が虚ろになっている。

そして、恥ずかしそうにこちらをチラチラと見てくる。

これは、俺の事が好きなのかっ！？いや、でも初対面だし、さっきまでツンツンだったし！しかし！あの顔は間違いなく恋してる顔だな！ふふふ

俺は――

何故か悲しかった。何故なら彼女は俺の事を好きはずないと知っていたからだ。俺みたいな陰気で不細工な奴を好きになる奴なんて

いないのだ。

俺は今までそう決めつけてきた。無駄に期待して、後で裏切られるのが怖いからだ。

だから――

そんな目で俺を見るな。

俺はおかしくない。

あなた

姫と呼ばれる彼女の名前はアヤ。あの荷物の宛名と同じ。やっぱり、この子が送ったんだろ。どうやって？さあ？

俺たちは、たくさんの研究員から白い目でみられながら、旅立った。優越感。

といつても、まずは城下町でショッピング。援助金として50000ゴールドもらってある。RPGの基本は装備だからな。いい武器を

「ちよつ、見て！この服可愛くないっ！？」

アヤちゃんは俺の手を引っ張りながら、服を指差す。その服は、白い清楚な感じの半袖のワンピース。

「いや、可愛いけど防具としてはどうか……」

「いいの！防御力が高くて可愛いくなかったら意味ないでしょ！」

「いや、でもそれじゃ死んじゃうじゃん」

アヤちゃん是不機嫌そうにこっちを見ながら

「ぷーだっ！」

「……………」

「ていうか、あなたの服装のほうが可笑しいでしょ」

アヤちゃんは笑いながら、俺の服装を査定するように見てくる。

そういえば、服は現実世界のままか。上は黒のシャツにグレーのパーカー。下は黒のショートパンツに黒のレギンス、白のハイテクスニーカー。

うん、そうなんだ。俺は勘違いお洒落さんなんだ。今、流行りのレギンス男子なんだ。似合っていないんだ。ふふふ

とにかく、俺の服装は女受けが悪い。女っばい。いや、実は女装好きなんだ。

「そ、そう？向こうの世界じゃ、こういうのが流行りなんだ」
嘘はついてない。似合ってるかは別だけど。

「……………そっか。とにかくあなたは着替えたほうがいいよ」
「はい……」

昔

俺たちは、しばしショッピングを楽しんだ。もちろん、俺は女の子とこんな風買い物するのはじめてで緊張した。とても幸せだった。例えばそれが嘘だとしても。

「あなた、結構似合うね！」

アヤちゃんが俺に着せたのは黒いパーカーに、太めのジーンズ、黄土色のブーツ。頭には、ツバがまつすぐなストリート系の帽子。どうやら、アヤちゃんはストリート系が好きらしい。うーむ。

「そっちのほうが全然かっこいいよ！」

アヤちゃんは、俺の身体にぴったりとひつついてきて、賛美の言葉を送った。

俺は、なんともいえない高揚感に包まれた。今までにない快感。

人に容姿を誉められるのはこんなに気持ちいいものなのか。今頃気付いた。

といつても、人から容姿をほめられるのは初めてではない。

俺は中学生になるまでは、美形だったのだ。これは、思い込みでない。

なぜなら、親や友人に可愛い、かっこいい、ジャーニーズ事務所には入れる。などと言われていたからだ。

しかし、中学生の頃から劣化したのだろうか？そんな言葉は聞かなくなつた。

昔、かっこいいと言われたとき対応に困っていたものだったが、今やキモイと言われたとき対応に困る。

ましてや、かっこいいと言われチャホヤされていた時の記憶がある

から、余計に劣等感を感じる。

あの頃の俺だったら・・・

あの頃が一番自信に満ちあふれていたのかもしれない・・・

「さあ、装備も整ったことだし、早速出発だ！」

「うんっ！」

アヤちゃんは、満面の笑みを浮かべる。

彼女の笑顔は可愛かった。

闘い

こうして、俺達は町を出て旅立った。

俺達は勇者御一行だ。それは勇ましく勇敢で高尚であるべきなのだ。俺は、現実世界の辛い思い出を忘れるかの如く、気持ちをリフレッシュさせ、気合いを入れる。

隣には、アヤちゃんという可愛らしい女の子までいる。

充実している。俺はこれからはじまるんだ。自分に言い聞かせる。

だが、しかし……

俺達は立ちすくんでいた。何故ならば、どこへ行けばいいのか分からなかったからだ。

魔王の居場所は分からないらしい。というより、みんな魔王を見たことがないらしい。

そもそも、魔王は存在するのか？ いや、するのだ。アヤちゃんの父親である王様が、殺されたのだから。

「どこへ行けばいいんだい？」アヤちゃんに聞いてみる

「知らない」

「……………」なんだそりゃ。

「ま、まあ！でもとりあえず近くに村があるから、そこ行こ！」

アヤちゃんは、俺が怒っているのかと思ったのか、慌てて言い直す。

「そっか、じゃあ早く行こ！」

「うんっ！」

俺達は、近くの村を目指して歩き出す。

景色は、RPGでお馴染みのただっ広い草原だ。さらに、ごく丁寧に村までの道を舗装してくれてる。助かるなあ。

近くの村までは、歩いて15分くらいらしい。

なんだか、散歩みたいだな。悪くないけど。

アヤちゃんは、さり気なく俺の手を握ってくる。もちろん、俺も握り返す。

普通だろ？ ああ、普通さ。

しばらく歩いていると、向こうから獣が走ってくる。

思わず立ちすくんでいると、獣は俺達の3メートル手前あたりで止まる。獣は、みた感じ狼にしか見えない。

「魔物よっ！ 第一種戦闘配置！」

勢いよく大きな声を張り上げ、俺の後ろに隠れるアヤちゃん。

「ちょ、おま！」

「いいっ！？ あたしは魔法使い兼僧侶なの！ だから、あなたは前衛で物理攻撃担当なの！」

「はあ」

なるほど、確かに女の子を傷つける訳にはいかないよね。うん、俺が守ってあげなきゃ。

俺は、先ほど貰った包丁を構える。

「カップルか。ムカムカするぜ。」

「！！！！」 喋った！

魔物のが喋った。魔物って喋るんだっけ？ どうだったけ？

「魔物も人間の言葉を理解できるよ、煽りもちよちよいのちよいなんだから。」

なるほど。俺のブログを荒らしたのも、魔物の仕業か。違うか。

「俺様はカップルが大嫌いなんだ！ シネ！」

狼みたいな魔物が、飛びかかってくる。

鋭く伸ばされた前足の爪。あれで、引っ搔かれたら痛そうだ。

俺は、こういう時こそ冷静になるべきと、そっと目を閉じた。

そして、念じた。俺は助かる。ここでは、死なない。勝つのは俺だ。

俺は、包丁を握り直し、パツと目を開く。

おかしい。

先ほどまで目の前にいた魔物はいなくなり、なにやら黒い塊が、焦げ臭い臭いを発してあるだけだ。

状況から判断すると、狼のような魔物は、丸焦げになっていたらしくかった。

「なんてことだ…。やり過ぎたか。」

目を瞑っている間に、もう一人の俺が、倒してしまったのだろう。

「ありがとう、もう一人の俺。また次も——」

ボカッ。

後頭部に痛みが走る。

振り向くと、半ば呆れたような顔をしたアヤちゃんがいた。

「あなたねえ、なにをぼーっと突っ立ってんの？あたしがいなかったら、あなた死んでたよ！」

やはり、そうか。魔物が、丸焦げになったのは、もう一人の俺が倒したのでなければ、プラズマの仕業でもない。

アヤちゃんのファイヤーの魔法のおかげだったのだ。

「申し訳ない…」

「ちよっと、もうーしっかりしてよーっ！」

アヤちゃんの顔に少しだけ笑みが浮かぶ。

ああ、アヤ。

君と僕

近くにある村は、俺達がいたアルナタ王国よりずっと小さく寂れていた。いわゆる田舎みたいだ。

村の入り口には、案内役らしき女性が立っていて、他にも何人かの村人が意味もなく歩いている。

何軒かの住居と商店が見える。どことなく、田舎の爺ちゃん家を出せる。俺は、親戚の集まりが嫌いだ。人見知りだし、特に接点もないよく知らないジジババの顔を伺わなければいけないから。同じ年頃の子もいるんだけど、俺とは違ってしっかりしているので引いてしまう。

アヤちゃんは、この村に何度も来ているらしい。通りすぎる人に、一々話し掛けられている。

「ありゃ、お姫様。今日は彼氏と一緒に？盛んだねえ。」

「やだーっ！オジサン、セクハラで独房に閉じこめますよー。」

「こりゃ参ったな！ははは！」

アヤちゃんは、本当に馴染んでいた。よく来るのだろうか？俺は、ただアヤちゃんと村人が話しているのを見ていただけだった。

どこかで見たような光景だ。仮想の世界でも俺はこうなのかな？なんだか、気分が落ちてきた。

町を出る時は、とても希望に満ち溢れていて、気分も良かったのに。俺は――

期待するのを止めた。

アヤちゃんは、一通り挨拶し終わると、一軒の家を訪ねた。

「ここはね、村長さんの家なの。物知りでね、なんかアドバイスしてくれると思うの。」

「へえー、そうなんだ。」

また、アヤちゃんと誰かの会話を聞かなければならないのか。しか

も、さつきは立ち話だったからすぐ終わったけど、今回は家だから長そうだし。

苦痛だ。苦痛。

「お邪魔しまーす。」

アヤちゃんは、俺の気持ちなどお構いなしにドアを開け、入っていく。

続けて俺も入る。

「なんだ！アヤちゃんじゃないか！」

村長という立場のせいもあるのか、村長さんはお姫様とは呼んでいなかった。

「村長さん、聞いてー——」

アヤちゃんは、手短に今までの経緯を話す。相変わらずの饒舌。話しが分かりやすい。

本当に楽しく、仲良そうに話すアヤちゃんを見て、俺はまたしても劣等感を感じた。俺は、こんな風に上手く喋る事ができない。いつも、話しの途中で分かりにくくなる。

友達に、どういうこと？と言われる事も、しょっちゅうだ。

村長さんは、時折面白くもないギャグをはさんでくる。アヤちゃんは、それも上手く笑ってかわす。と、思ったけど、アヤちゃんは苦笑いをしていた。会話の途中に興味なさそうな顔をする時もあった。驚いた。世渡りが上手い奴は、完璧に演じきるものなんだけど、アヤちゃんは違うらしかった。

その、時折見せる表情は誰かに似ていた。気がした。

誰が

俺達は、村長さんに礼を言い、家を出た。

まとめていうと、魔王の居場所は分からないが、旅をするのには車があつたほうがいいだろう。

車は、近くのトンネルを越えて、少しいったところの国に、安くで売っているらしいとのこと。

とりあえず、俺達はそこを目指すことにした。

「まあ、目指す場所が見つかってよかったね」

アヤちゃんに話し掛ける。

「だね。早く行きたい——ところだけど、今日はもう遅いから、宿屋に泊まりましょ」

そういえば、あたりは薄暗くなってきた。こつちに来てから初めての夜。なんだか、妙なきぶん。

俺達は、村の真ん中にある宿屋へ向かって歩いてた

「あー、今日は疲れたび。」

「疲れたび?」

「あつ。あたしの口癖ね。覚えといて。」

「やだよ。」

よく分からないので、意地悪っぽく返事を返す。「ぷーだっ!」

「…それも口癖?」

「そだよ」

彼女は不思議系になりたいのか、ツンデレ系なのか、よくわからなかった。

「あなた、前の世界で彼女とか居たのこと? いないよね?」

「なんで決めつけんの?」

「見た目で」

殺意が湧いた。大体、こういう無神経な事をいう奴がいるから、俺は死にたくなるんだ。

あれか。結局、顔か。しねシネ死ね。

俺は、今の今までアヤちゃんに好意を抱いていたと思う。可愛いし、ボディタッチ多いし、なんだかアヤちゃんとなら上手く喋れるし。でも――

その気持ちは今死んだ。

きっと、あれだ。キミも同じだろう。あの僕を馬鹿にしたような目で見てくるあいつらと。

きっと、キミも僕を否定するだろう。僕の容姿、仕草、全てを拒否するのだろう。

ああ、ふざけるなよ。なんで、こんな訳わかんない世界に来てまで、こんな思いをしなければならぬのだ。

僕は――

俺は、なんだかこの世界にも希望がないような気がしてダルくなった。

だから、それからアヤちゃんが話し掛けてきても、適当に相槌を打っただけだった。

初体験まで

アヤちゃんは俺が機嫌悪くなったと思ったのか謝ってきた。

「ごめんね・・・」

「別に」

俺は一言返すだけだった。

その後、アヤちゃんは気をつかってか話しかけてきてくれたが話す気分にはなれず、適当に返事をするくらいだった。

そんな俺を見て呆れたかのかどうかは分からないが

アヤちゃんは俺に話しかけてこなくなった。

俺達はただ黙って宿屋へ向かう道を歩いた。

宿屋に着くと、アヤちゃんが慣れた手つきで受け付けを済ませ、案内された部屋へ向かう。俺はただついていくだけ。

カッコワルイ。

今日は、休日前で部屋がいっぱいらしく、俺達は一人用の部屋で二人泊まることになった。部屋の奥には、ふかふかのシングルベッド。

ほかに、ソファにテーブル、テレビまである。びっくりだ。

この世界にはテレビもあるのか。何を流すんだ？まじで。

アヤちゃんに聞いたが、話したくなかったので聞かないでいた。

トイレと風呂もある。これじゃまるで普通のホテルじゃないか。いったいどういう時代なんだ。文明はどこまで進んでいるんだ。分からなかったけど、ただ、ここにいれば元の世界にいる気持ちになれると思った。

アヤちゃんは怒っているらしかった。

当たり前だ。

謝っても許してくれない、話しかけてもしやべらない。
怒って当然だ。俺だって怒る。

きつと、アヤちゃんは場を和ませようとしたんだ。

だから、ちよつとした冗談のつもりだったんだろ。

俺を傷つける気はなかった。

きつと、そうだ。そうだろ？

そうなんだろ？

俺は――

「ごめんね、アヤちゃん」

謝った。

勝手な被害妄想で自らの殻に閉じこもってしまった。
いつだって、避けていたのは僕の方だったんだ。

「何が？」

アヤちゃんはまだ怒っているらしかった。

ちよつと涙ぐんでいてるが、不機嫌そうな表情だ。

「いや、なんか怒らせちゃって…」

上手く言葉が出てこない。

「……」

「もういいよ」

アヤちゃんの声は優しくかった。可愛かった。

「あたしのほうこそ、ごめんね。傷つけちゃった…」

申しわけなさそうに、こつちを上目使いでみてる。あまりの可愛
さに思わず抱きしめる。肉食なのさ、実は。

アヤちゃんに顔を近づける。

アヤちゃんはキスをしたそうにこちらを見ている。

キスをしますか？

↓はい

俺の初めてのキスを捧げた。アヤちゃんに。出会って間もない女に。

彼女でもないのに。

そう考えると興奮してくる。もう、これは、OKのサイン、だよな。

俺は――

世界は死にました

俺はアヤちゃんの後ろに手を回し、デニムのミニスカートの上からおしりを触る。

スリスリと撫でるように触る。

ああ、なんてもちもちとした触感なんだろう。最高だ。

そのまま抱きしめたまま、首筋にキスをする。

「ん・・・んあ」

なんて可愛い声なんだ！そして次はどうすれば良いんだ！

とりあえず胸を揉んでみる。ぴちぴちのＴシャツの上からはつきりと形が分かるいやらしい胸だ。

左手でお尻を、右手で胸を揉んでいるといった感じか。

アヤちゃんはグツタリとして息が荒くなっている。

感じているのかな？

俺は一気に攻めるべく秘境に手を伸ばす。

レギンスも履いているので、よく分からないが湿っている気がする。

正確な位置が分からないので、適当に撫で回したり、押しついたりする。

アヤちゃんは、相変わらずハアハア言ってる何も言わない。

合ってるのかなこれで？少し不安になってきたな・・・。

左手で押しつけているうちに、左手の指が濡れてきた。

すると、アヤちゃんが俺の左手を持ち秘境から離れた。

まずったかな・・・。と、思っている

現実から目を背けている限り真実は見つからないよ

俺は――

目が覚めた。いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

俺は、今の状況がイマイチ把握できずにいた。

ゆっくりと記憶を辿る。

そうだ…俺は

アヤとセックスしようとして……

そこで俺は考えることを止めた。

考えたくなかった。だってそうだろう？誰だって自分の無様な姿は思い出したくないはずだ。

吐き気がする。

自分に嫌気がさす。自己嫌悪。自分を責める。なぜ俺はあの時…な
どと無意味な後悔。

ああ、意味はない。

なぜなら……

隣に目をやる。アヤが服を着たまま、すやすやと寝ている。俺は、
そっとベッドを抜け出し、服を着替える。宿屋に用意されたコーヒ
ーを少しだけ飲み、荷物をまとめた。

用意は万全だ。早くここから逃げ出そう。俺は、アヤちゃんが起き
ないよう、そっとドアを開け部屋を出る。そして、そのまま宿屋を
出て走り出す。

行き先かい？知らないなあ。

ただ走りたかっただけだ。

逃げたかっただけだ。

セックスするのが怖くなって逃げ出した自分を殺したかったんだ。

真夜中、あなた、わたし（前書き）

わたしには借金が二百万あります
現実逃避？たりめーよ！
吐き気がするもの

真夜中、あなた、わたし

逃げ出した僕は村を出てもなお、走り続けていた。気分はオリンピック金メダリスト。

僕はよく妄想をする。それは圧倒的な能力でみんなから注目を浴び羨ましがられ崇拜される妄想。

でもそれはただの妄想にすぎない。妄想で留めておくべきなのだ。

俺には似つかわしくないんだ

幸せ　　が

全力疾走でずっと走っていたので肺が苦しくなってきた。僕は走るのを止めた。そして、草の上に仰向けに倒れ込む。

はあ　　はあ

はあ

息が苦しい

胸が苦しい

吐き気がする

逃げ出したんだ　　また

幸せならそこにあつたじゃないか

神様は平等だ。こんな俺にも幸せを与えてくれているのではないか。

だが、俺はいつもその幸せを自ら放棄する。

似つかわしくないんだ

僕は嘔吐した。

置いてきたアナタを想って

想う気持ちは憎しみへと変わり殺意になる

俺は何度繰り返せば分かるのだろうか…。

いや、本当は気づいていたのだ。

だが、認めたくなかっただけだ。

どれくらいの時がたっただろう。あんなにも暗かった空も明るくなってきた。かすかに朝日が見える。

もうどうでもいいと思った。羞恥心も何も感じない。誰にどう思われようと別に構わない。だったら俺は何でもできるはずだ。逆に言えば、こういう状況にならなければ何もできない。だから、俺は不幸を望むのだ。不幸になった時だけ俺は自由になれる。

そんな高尚とも言える思考巡らせていると、誰かが近づいてくる気配がした。しかし、今の俺にはどうでも良かったので、仰向けで寝たまま視線だけ向けた。

そこには、一人の人間が俺を見下ろしていた。だが…

おかしい。空は明るいはずなのにそいつの顔は暗くぼんやりしている。全身黒ずくめで、まるで影のようだ。

「満たしてあげましょう」そいつは言う。

「意味が分からないな」

どこの誰かは知らないが今の俺にとっては何もかもが腹立たしい。殺すぞ。

「ははは、わかってるくせに。あなたはもう何をしても満たされない。満足できないわ。」

……。

どきりとした。凶星だった。

俺は初めての s e x をも逃げ出した。それは、俺が今まで最も望んでいたものだったのに。

何故か怖くなって虚しくなって……仮想空間だというのに。

仮想空間だから何したって夢みたいなものだ。なのに俺にはまだ自由がなかった。勇気がなかった。

「あなたは病気なのです。今すぐに治療をしなければいけません。なかに、治療はすぐに終わりますよ。さすれば、あなたは幸せを享受できるでしょう。」

そいつはニヤリとはにかんだ。

「いいですか？」

俺は救いを求めた。この、何をしても満たされずなんの感情も沸いてこなくなった俺を――

殺してくれ

そいつは手を伸ばしてこういった。

「悪魔の契約を。」

俺も手を伸ばし握り返す。

「ようこそ。世界の終わりへ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322i/>

依存する世界と似非なる自殺願望

2010年11月23日04時05分発行